

史遊会通信

No.232号
平成26年
6月10日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

五月講演要旨

年輪・炭素年代に関する科学データの信憑性

… 法隆寺芯柱の年輪年代等について …

高橋正彦

講演では年輪等データ（＝一般に氷柱・湖底堆積等を含む Proxy-Data）において、原データを公開せず論議を進める科学論文の危うさを、地球温暖化問題において例示し、更に是に対する対処法を本邦年輪年代において考察した。

……論議前半が分かり難いとの御講評が多く、かつ後半部分の説明不十分の為、茲に論点を絞り再説する。

【温暖化論に関する真実の究明】

温暖化対処の国連政府間パネル＝IPCC 古気候部門の指導的研究者を務めた、英-UEA 大気候研究所-CRU 副所長である K. Briffa 教授の二〇〇八年論文のホッケースティック状態に疑問を持つ、一般人 MacIntyre の粘り強い論文の年輪データ開示要求に対し、二〇一三年に結果的に年輪データは開示された。

この結果、二〇世紀末ホッケースティック気温急騰説が作為的強弁であったことが暴露され、これは気候学会に激しい狼狽を与えた状

例会のお知らせ

◎ 六月例会

日時 平成二十六年六月二十五日(水)

午後六時十分～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 平山善之氏

テーマ 続日本紀・二つの「なぜ？」

七月号自由執筆 佐藤健一、村上邦治、

漆原直子の諸氏 締切六月末

◎ 七月例会

日時 平成二十六年七月二十三日(水)

午後六時十分～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

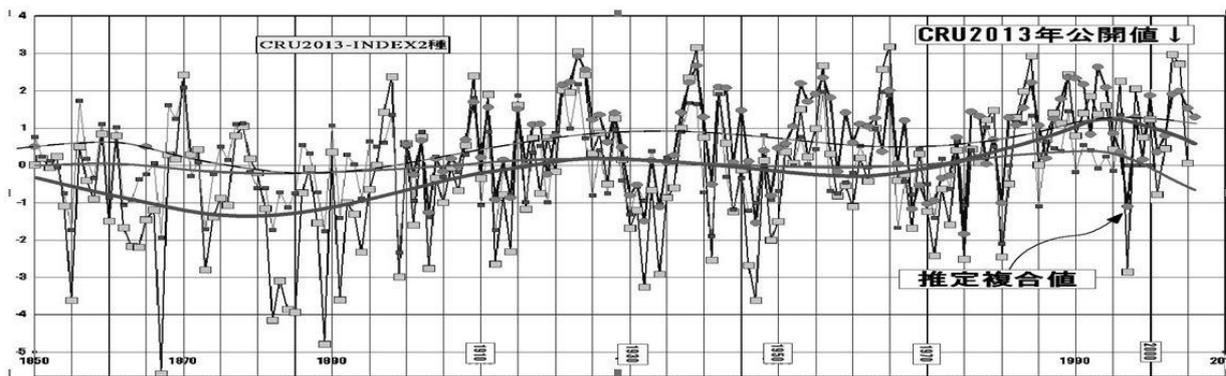
四階セミナールーム

講演 佐藤健一氏

テーマ 未定

九月号自由執筆 鯨游海、平山善之、

小田紘一郎の諸氏 締切七月末



況を PAGES

による同年

四月の

NATURE の論

文上に見ら

れる「極端な

矛盾」で示し

た。更にこれ

らの不都合

な事実容認

の裏には、

CRU による

既存観測値

訂正の可能

性があると

推定した。

世界気温

が温暖化過

程にあるか

否かの判断

を一般大衆

が判断する

事は極めて

難しい。然し

この一方に

深く関与する当事者の自己矛盾的表現から、温暖化の進展に躊躇を感じた心象状態の真実を知る事ができる。

： 即ち、不利益な事実供述＝自白

には信憑性がある場合がある。：

【本論のキープポイント】

Macintyre の勝利宣言的ブログのグラフの相当部分が、CRU のホームページ上の公開データに存在しない可能性が講演二日前に判明した。この線が崩れると本講演の基本が無為に帰する。

結局 CRU データの ①YAMAL-TR W, ②POLAR-TRW, ③POL-MXD, ④Yamalia-TRW の各 INDEX データの ③④ないし①④を複合した可能性が判明した。是等 4 種はいずれも一九九〇年頃をピークとし、5 説を構成せず、複合しても問題はない。(表の y 値は温度 ◆では Index 値を基準とする)

【POXY データの潜在的問題点】

この様な作為が生ずる要因は、一般の科学的測定データに対し年輪等データは多量かつ環境による変移幅が大きく、是を標準化しな

ければ客観的データにならず、この手順が複雑であり、更に大量の異種 POXY データの比較には是等を統合する必要があり、結局、大部分の過程を PC によるデータ処理に依存し、全過程がブラックボックス化している事にある。

：即ち、データ群の全体像・その結論を導き出す処理過程が不透明・可視化されず、その過程に不自然があつても気付きにくい。

そこでこれ等素データの公開を拒む科学論文に関しては究極まで論点を整理し、類論と比較対象し易く、簡明な形態に突き詰める必要がある。：例えば温暖化論に関する推論に於ては、年輪値 (TRW: MXD=年輪最密度) と気温との相関推計式の形成過程は厳密な比較対校が為されていない。

この究極的論点整理により諸論素データの真価が判断され得る様に思える。

【本邦年輪問題に関する対処】

実データの公開を拒む本邦年輪年代の現状に関しては、論点を極めて明快な次の三点に絞る問題の解明を試みている。

①年輪幅の経年推移と ΔIAC 値 (IAC の当年別の濃度) との間には緩い相関がある。

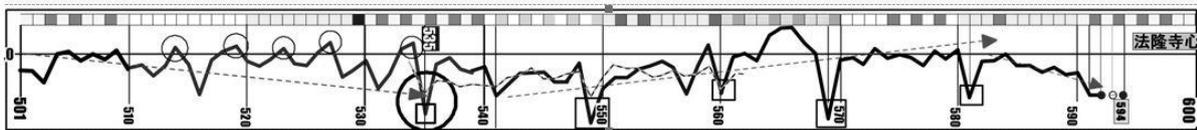
②是等は約紀元前六〇〇年以降は緩慢下向、約紀元五〇〇以降三百年間は緩慢上昇傾向を取る。

③世界規模で、 $\Delta 14C$ 値の回頭点西暦五二五年に対し、年輪変移の底は五三六年である。(五二五年と五三六年は絶対年代である)

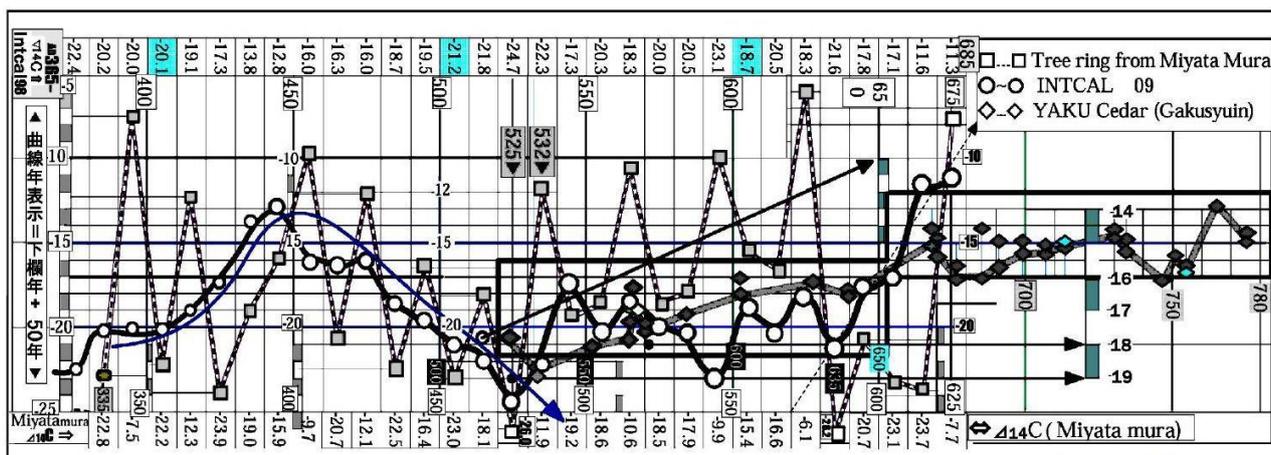
光谷巧実氏が公開する法隆寺芯柱の年輪パターンを年次別野線で区切り、パターンの底となる年次を見ると、五三・五四一・五四九年が得られる。これは Briffa-2008 年が示す北歐露方面の六世紀の年輪異常 \equiv 五三六 Dust Veil Event (例えば Finland では五三六・五四一・五五〇年)に極めてよく相関する。ここから世界的規模で生じた五三六年の地球寒冷化現象は本邦にも影響し、特に法隆寺芯柱にその痕跡が顕著に残された事がわかる。

【光谷年輪データの信憑性】

法隆寺の光谷年輪パターンは Dust-Veil の Event に一年の乖離でよく合致する事から、現象に何の予備知識なく独立に年次決定がなされた物であり、



法隆寺芯柱年輪パターン(光谷)図



歴博の宮田村炭素年代測定値

これに関する限りパターン信憑性がある。(法隆寺芯柱の伐採年次は五九一年であり、紀元七〇〇年前後 \equiv 驚崎説は有り得ない。)

但し Dust-Veil の開始絶対年代は、地球規模で五三六年であり、光谷年輪年代は一年の誤差がある事になる。

但し、年輪変移に十一年の時間差で乖離すべき $\Delta 14C$ の変移に関する歴博の伊那谷・宮田村の較正年代には異論がある。(Minoru Sakamoto, et al Radio Carbon Vol145, Nr1, 2003)。同誌上の【炭素年次】年輪年次(較正年次)より、その元となった年次毎の $\Delta 14C$ 値は逆算でき、是を示したものが上図である。

計算過程及び計算値は、本会の新井宏先生よりご提供頂いたものである。――
 ● 図中の鎖線□(年次・データは下欄)がこれであり、是と並行する INT-CAL 値を○で対比している。(但し、実数値・年次は最上欄による)の谷は五二五年となり、両者に五十年の乖離がある事になる。なお本邦年輪サンプルにおける $\Delta 14C$ の谷の希少な測定例(屋久杉)を◆で示した。
 この対比により前者の谷の四七六年に

対し後者の谷は五二五年となり、両者に五十年の乖離がある事になる。なお本邦年輪サンプルにおける $\Delta 14C$ の谷の希少な測定例(屋久杉)を◆で示した。

上野弘貴(学習院)、日本放射化学会年会
発表要旨集 2007-51st-p79

この例において本邦年輪サンプルでも五二五年頃を底とする世界的変移が存在することは明らかである。(宮田村14C炭素値の谷が刻印された年輪サンプルに対し、【一層二十年】二層二十年】先のサンプルの中に、本来は最も狭い年輪が含まれるべきであった。)14Cにおける谷と年輪における谷は十年幅で繋がりが、その位置は極めて目視し易いのが特色である。

この両者がズレた要因は、

【光谷年輪パターンが不完全】か或いは、

【故意に年代を五十年古くなるべく作爲した】……かの何れかである。

【西暦五〇〇年以前の年輪問題への対処】

原データを公開しない年輪パターン研究の現状において、絶対年代536年が確定された意味は大きい。これ以後、この明確な定点以降の年輪成果は一切考慮する必要はなく、全

力をそれ以前の年代分析に集中できる。

その最も有力な候補は学習院蔵の屋久杉(樹齢1930年)であり、学習院においては07年の14C分析を再補完されることを要望する。

また、歴博は宮田村埋没樹に対し、14Cの変移の谷がAD475年(光谷年輪年代)にあるのか、五二五年にあるのかを明確に決定すべきであり、明確な論拠の補完なく西暦五〇〇年以前の年代復元は唱導すべきではない。

(2014年5月30日)

相原精次さんの雑誌記事掲

元「史遊会会員」の相原精次さんが、雑誌「歴史REAL」シリーズの『巨大古墳と古代天皇陵の謎』(洋泉社)の「【地方別】巨大古墳と地方王権を考える」の「毛野・越・尾張・丹後」について執筆され、店頭に出まわっているとのことだ。

六月講演予告

続日本紀・二二〇の「なぜ?」

平山善之

昨年、私は続日本紀の第一巻から第四十巻迄原文と読み下し文双方の通読を試みた。

編年体の史書というものは、通読してみても生ずる二種類の疑問がある。

一つは「なぜ、これが書かれていないのか?」であり、もう一つは「なぜ、ここまで書いたのか?」である。いずれも必要なところだけつまみ読みをしていてはわからず、通読してみても初めて気がつく。

そして私が抱いた疑問に対して、納得のいく解答を示してくれる解説書に出会わなかった。そうした幾つかの「なぜ?」の中から、書いてないことの代表として「皆麻呂征討の結果はなぜ書かれなかったのか」を、書きすぎの代表として「桓武天皇はなぜ自分の治世前半まで書かせたのか」を考えてみたい。

推測するしかないのであるが、周辺の状況から推理してみると、そこに天皇や、著者の、極めて人間的な感情や、つながりを覗き見られるように、私は思う。

自由原稿

天智天皇の称号について

森下 征二

当会の三月講演は隆恵氏の「天智天皇の謎解き」であったが、私は病気のため、残念ながら出席できなかった。しかし、後日講演要旨を送付頂き、隆氏の古代日本史の謎に対する独特の見解と、並々ならぬ情熱を拝見出来たことは、同好の士として誠にたのしく、嬉しい限りであった。

中でも「記紀」の編纂上の根底には、天智天皇の神聖化があるとの指摘については、私としても全く異論がないので、以下、講演とは違う視点から、即ち天智天皇の称号を考へることによって、隆氏の説を支持・補強して行きたいと思う。

さて、歴代天皇は神武以来今上まで一二五代とされている。各天皇の称号を一覧すると面白いことに気が付く。それは「天」がつく称号が、天智・天武の二帝しかいないと言うことである。同じく天皇の神性（或いは英雄性）を示す「神」は神武・崇神・応神の三帝、「武」は、神武・武烈・天武・文武・聖武・桓武の六帝である。「天」はこれらに比しても

明らかに少なく、この字の付く称号には特殊な意味があることが推測される。

それでは天智の「智」の字はどうか？ 実は、この字を称号に使った天皇は外に誰もいないのだ。それでは「智」の字もやはり、特殊な意味を持つのだろうか？

試みに、諸橋轍次氏の「大漢和辞典」を引いてみると、「智」の字の項には、「智」は「知」に通ずとあり、「知」の字の項には、「知」は「智」に同じとある。要するに、天智の「智」は「知」でもあるので、今度は「知」の字の意味を調べると、何とそこには「治める」と言う意味があるではないか。如何にも支配者にふさわしい漢字である。

しかし、「知」には色々な意味がある。果たして天智の「智」は「治める」と言う意味だろうか？ 今度はそれを「記紀」に当たって見てみよう。

日本の国を開いた初代の天皇は誰か？ それは「ハツクニシラスメラミコト」と呼ばれるのは周知のことである。日本書紀ではこれを「始馭天下之天皇」とも「御肇国天皇」とも記す。「始馭天下之天皇」とは神武天皇のことであり、「御肇国天皇」と崇神天皇のことである。即ち、日本書紀では日本国を開国した天皇である「ハツクニシラスメラミコト」

は二人いることになる。

他方、古事記はどうか？ 古事記における「ハツクニシラスメラミコト」は崇神天皇一人を指す。しかし、その表記に注目してほしい。古事記においてはそれを、「所知初国之御真木天皇（初国知らしし御真木天皇）」と記すのである。「ハツクニシラス（初めて国を治めた）」は「初国知らず」と書くと言うのだ。ここでは何と、「治」ではなく「知」の字が使われているではないか。「知」は「治」を意味する。そうだとすれば、天智（知）天皇もまた、「ハツクニシラスメラミコト」と言うことにならないか？

つまり記紀の背後には、天智天皇もまた日本国を開国した天皇である…との主張が隠されているのだ。だからこそ、天智の「智（知）」を用いることができた天皇は、彼の外にいないのであろう。

それを示す根拠は外にもある。それは天智の和風諡号「アミノミコトヒラカスワケ」である。これは後世の史書により、「天命開別天皇」と記される。諡（おくりな）の実質的な意味を示す「開別」の「別」は、例の漢和辞典によると、「辨（べん）」と同じで、開辨（かいべつ）は開辨（かいべん）となり、開辨は「事を始める」とか「開業する」の意味を持

つ。即ち、天智の和風諡号である天命開別天皇は「天命を受けて国を開いた天皇」を意味することになり、ハツクシシラスメラミコトを表記したものと云えるようだ。天智天皇もまた日本国を開国した（開国の内容はその出現の段階に応じて変わるようだが）、初代の天皇の一人であると言うことになる。

そこで再び、隆氏の講演要旨の鋭い指摘に触れておきたい。

【書紀（おそらく古事記も——筆者）の編纂者は天武天皇の皇后で、天武亡き後即位する持統天皇の血統の天皇たちの、血統の正当性を天智天皇にも留めているので、天智の神聖視が編纂上の根底にあることを、肝に銘じておく必要がある】

上記の氏の主張は叙上の通り、私の天智天皇の称号の考察の結果（ハツクシシラスメラミコトは三人いた）天智は神武・崇神と同格の神性を持つ）とも合致する。私が隆氏の講演を良し…とする所以である。隆氏の古代史研究が、今後ますます発展されることを期待してやまない。

自由原稿

「師・勝海舟と門弟・坂本龍馬」

の幕末・維新

諸橋 奏

「幕末」を文字通りに「江戸（徳川）幕府の末期」と捉えようと、広義には天保十二年（一八四一）に老中水野忠邦が始めた「天保の改革」

からとみることも出来る。「天保の飢饉」（天保四〜七年）や「大塩の乱」（天保八年）などの社会不安に対し幕府をはじめとして、諸藩も藩政改革に着手、藩政立て直しに成功した薩摩・長州・土佐藩は幕末の政局を動かすまでの力をつけた。一方幕府の改革は悉く失敗し、忠邦は天保十四年に失脚した。その結果、幕府の基本的権力である領知権・転封権の衰退を天下に露呈することとなった。

狭義では嘉永六年（一八五三）六月三日のペリー浦賀来航後を言い、開港などの外圧に於いての幕府の対応をめぐっておきた開国・開港論と鎖国・攘夷論の対立が、公武合体論や尊王攘夷論、更には佐幕派對尊皇倒幕派と国を二分しての大事に至った。そしてこの難局

の終止符が「明治維新」であった。

維新を極く狭義に捉えれば、江戸幕府が崩壊して天皇中心の新政府が成立した慶応三年（二八六七）十月十四日、第十五代将軍徳川慶喜が倒幕を避けるため朝廷に「大政奉還」を申し出て受理された日ということである。この日を画期として日本は近代国家をめざして突き進むこととなった。

この国家的大業に大きく貢献したのが、勝海舟と坂本龍馬の師弟であった。

坂本龍馬は天保六年（一八三五）十一月十五日、土佐藩郷士（下級武士）とはいえ、裕福であった坂本八平直足と妻・幸の次男として誕生した。長男権平は龍馬より二十一歳年上、それに姉三人（長女千鶴の夫高松順蔵は二十八歳年長）家族の末子であった。幼少時は気弱だったが、十二歳の時生母が死去、以後は三歳年上の姉・乙女が武芸・学問をスパルタ式に教えたという。また十四歳で入門した日根野弁治剣術道場での勉学は嘉永六年（一八五三）、十九歳で剣術修業のため江戸に出るきっかけとなった。

人間の社会能力（対人関係・自主能力）の臨界期は十五歳といわれるが、人間龍馬の最大

臣の立場上その行動には自ら制約がある海舟に對し、自由に活動出来る龍馬は以心伝心、師の意を体して彼の知力を存分に發揮した。

幕末日本の最大出来事「薩長盟約」が慶応二年(一八六六)一月二十二日、龍馬の仲介で結ばれたのである。

対立していた薩摩と長州の両藩が、幕府の長州再征の直前に「幕府に對抗して協力すること」を約束したのであった。誰もが不可能としていた犬猿の仲の両藩のまさかの倒幕連合の成功は、龍馬の知恵と奔走に、幸運が重なったのであった。

海舟の失脚で活躍の場を失っていた龍馬は海軍強化を策していた薩摩藩の小松帯刀や西郷隆盛ら首脳の資金援助を受けて慶応元年(一八六五)五月、長崎に商業活動を主とする貿易会社「亀山社中」を立ち上げていたが、この組織を使って倒幕急先鋒の長州藩に幕府禁止の兵器を薩摩藩名義で調達、転売する放れ業で両藩を結び、信頼を深めていった。

偶薩長両藩は共々、列強の武力の脅威を「さきの「戦争」で思い知らされていた。文久三年(一八六三)七月の「薩英戦争」と、元治元年(一八六四)八月の四国(英・仏・米・蘭)艦隊

下関砲撃事件「下関戦争」である。

しかし、この「盟約」成立の陰には海舟の布石があった。元治元年八月の中旬頃、かの騒乱の最中に龍馬は海舟の改めての紹介で西郷隆盛に面会している。この時の印象を龍馬は海舟に「(隆盛は)少し叩けば少し響き、大きく叩けば大きく響く」との名評を残している。隆盛もまた「度量の大、龍馬に如くもの、未だかつて見ず。龍馬の度量や到底測るべからず」と評したという。この二人の相互信頼こそが、実は同盟成功を決めた最大要因であったといわれている。隆盛は文政十年(一八二七)生れ、龍馬の八歳年上であった。

「盟約」の一方の長州代表・桂小五郎(木戸孝允)は盟約成立後も薩摩への不信感が強く、二月五日仲介者龍馬に盟約履行の裏書を求め、龍馬は朱書した。難事の程が窺える話である。

龍馬が係った大業はもうひとつある。それは土佐藩の後藤象二郎を背後から動かして、武力倒幕路線の薩長勢に對し、内乱による列強介入の口実を与えない方策として考え出した、「船中八策」を原案とする「大政奉還」の奇策を実現させたことである。

龍馬から、象二郎、山内容堂を繋いで、徳

川最後の將軍慶喜は慶応三年(一八六七)十月十四日明治天皇に「大政奉還」を上奏、翌十五日勅許が下されたのであった。ここに徳川家康が慶長八年(一六〇三)江戸に開いた幕府は、無血で二百六十余年の幕を閉じた。

そして立役者坂本龍馬は「大政奉還」から一ヶ月後の十一月十五日、京都の近江屋で、陸援隊の中岡慎太郎と共に幕府付属の見廻組隊士らに暗殺された。享年三十三歳。

勝海舟の偉業「江戸城無血開城」は翌年の慶応四年四月十一日である。龍馬の「大政奉還」はその半年前であった。「常に列強を意識し、内戦を極力回避しつつ、幕藩体制を出来る限り穏便に終熄させ、国を一つにして近代化を急ぐこと」を理想とした海舟の「意を体した」行動に龍馬がいかに忠実に終始したかに驚くばかりである。「此の師有りて斯に此の門弟あり」であった。

幕末・維新の日本の進路は、師・勝海舟の知徳と門弟・坂本龍馬の知力(知恵と行動力)との結合の賜物であったといっても過言ではないであろう。

自由原稿

ノモンハン

―第二次世界大戦を誘発した極東の局地戦

太田 精一

戦禍の傷跡の残る昭和二十二年、私は、遠縁に当る元陸軍航空士官で、ノモンハン（一九三九年夏）に参戦した人から当時の戦闘の模様を聞いた。

ノモンハンとは、モンゴル東部の満州側に突き出た草深い平らな土地の小さな村落の名前である。その村は、南北に流れるハルハ河のほとりにある。ソヴェエト連邦共和国（ソ連）側では、河の名からこの戦いを「ハルハ河の会戦」と称している。

その頃私は、小学五年生で、軍国教育の影響を受け、復員兵士の語る戦争体験談に異常なほどの興味を持っていた。

彼は、ノモンハンでのソ連軍との戦いは、凄惨を極めたと語った。空軍も当初は、日本が優勢であった。ところが、ソ連が、新鋭機を投入、航空兵力を増強するにつれ、日本軍は次第に劣勢に立たされ、そのまま戦いは終わってしまった。

その時、刻み込まれたノモンハンという地名は、ずっと成人して社会人になるまで私の脳裏から離れなかった。

ジェットロに入って初めての海外出張が、ソ連（現ロシア）のモスクワで、一九七〇年の二月から五月まで同地に滞在した。折角の機会であるので、ソ連について学ぼうと考え、ソ連とその最主要共和国であるロシアに関する本を数冊買いこんだ。

その中に、朝日新聞出版の「ジューコフ元帥回想録―革命・大戦・平和」があった。

この回想録の第七章ハルハ河宣戦布告なき戦争に、ノモンハンでソ連軍の直接指揮に当たったジューコフ元帥（当時第五七特別兵団長）が、同地での日ソ間の戦闘の模様を回想している。

私は、すぐにその第七章を熟読し、ソ連のこの戦いに懸ける意気込みの並々ならぬものを感じ取った。

その頃から私は、一九三九年のノモンハン事件は、モンゴルと満州の国境を巡る日本軍とソ連軍との軍事衝突として片づけられる問題ではなく、その後の日本、ソ連の外交政策を左右する大きな要素となり、ひいては第二次世界大戦を誘発するきっかけとなったので

はないかと考えるようになった。

だが、その後、深くこの問題を追及する機会を得ないまま、時がたち、対ロシア及び第二次世界大戦開戦時の問題を考える上で、ノモンハン事件をどのように位置づけるか、思いを巡らすこともなかった。

それが本年四月、日経新聞の日曜版を眺めていると、ノモンハンに関する単行本の書評が目にとまった。

単行本の題名は「ノモンハン1939」である。同書は、スチュアート・D・ゴルドマン博士の著述によるもので、山岡由美、麻田雅文の両氏が共訳している。

ゴルドマン博士は、全米ユーラシア・東ヨーロッパ研究評議会の在外教授である。一九七九年から二〇〇九年までの三十年間、米国議会図書館調査局で、専門委員として、ロシア及びユーラシア地域の政治、軍事情勢の研究に携わってきた。博士号は、ジョージタウン大学で取得している。

彼は「この紛争は、単なる国境衝突事件などではない。十万人近くの人が、また千台もの装甲車両および軍用機が四ヶ月の間激烈な戦闘に投入されたのである。死傷者は三万から四万に上る。宣戦布告なきこの小さな戦争

は、日本ではノモンハン事件、ロシアとモンゴルでは、ハルハ河会戦として知られている。辻とジューコフはこの紛争の最も重要な役割を演じることになった。ジューコフは、ナチ・

ドイツに対する勝利の設計者に、その後はソ連国防相の地位に上りつめたのである。しかし、それよりも瞠目すべきは、内陸アジアの僻遠の地で戦われたこの知名度の低い紛争が、ヒトラーによるポーランド侵攻、およびその後続いたあらゆる出来事の導火線になったのである。実際、ノモンハンでの戦いが頂点に達した時と同じくして独ソ不可侵条約が締結されている。(同条約は一九三九年八月二十三日に署名された) ヒトラーにとっては、この条約がポーランド侵攻の青信号となり、一週間後に第二次世界大戦を引き起こした。ヒトラーは、この条約により英、仏、ソとの戦争が避けられると判断し、ポーランド侵攻を開始した。また、この条約は、日本へのソ連の強硬姿勢を可能にするものとなった」と断じている。

私は、この文章を読んでわが意を強くした。一九三九年にノモンハンの戦いは終わっている。だが、一九四一年の日ソ両政府の外交上の意思決定に大きな影響を与えた。対ソ戦を

避け、米国との戦争に踏み切った日本、対独戦に全力を傾け勝利した赤軍と明暗がはっきり分かれたのである。

ジューコフ元帥は「日本の空軍がモンゴル人民共和国の領土深く侵入し、わが軍の飛行機に射撃を加え、追跡している。すべての情況は、この事件が、国境紛争ではない。日本は、ソ連極東およびモンゴル人民共和国に対し、侵略の目的を放棄していない。近いうちにさらに大規模な日本軍の行動を予想しなければならぬ」という認識に立ってノモンハンを戦った。

そのため、「空軍部隊を補強し、戦闘行動地域への歩兵三個師団以上、戦車一個旅団を派遣し、砲兵を著しく強化する」として、対抗措置を速やかに講じ、日本軍を上回る空軍力、火力、兵力を準備し、日本軍の行動を封じ込めようとした。

当時の日本は、赤軍は技術的に遅れ、戦闘力の点でも、日露戦争当時の旧ロシア軍と同じと見ていた。だから、日本の兵士が、ノモンハンの戦闘で戦車、空軍、砲兵、および良く組織された歩兵部隊の強力な攻撃に晒されることはまったく予想していなかったのである。

ソ連、モンゴル軍の強力な反撃による日本軍精鋭部隊の敗北は、当時の日本の支配層にソ連の戦闘能力とその軍事的組織力の高さから対ソ戦が困難であると印象づけた。

ジューコフ元帥は「日本軍の技術は、遅れている。戦車は老朽化し、装備も悪い。空軍は、当初かなりすぐれていたが、ソ連軍の新鋭機が出撃することによって制空権も失ってしまった」と書いている。

日本はその後、日、独、伊三国同盟を締結、日ソ中立条約を結んで、南方への進出を図り、太平洋戦争への道を歩んだ。

例え局地的な限定戦争といえども、甘く見ではならない。それによって、相手国の軍事情力、科学技術力、国力を推し量り、同盟関係を検討し、外交戦略を構築することになるからである。ノモンハン事件は、そのことを教訓として残してくれている。